

我が国の青森県六ヶ所村も使用済燃料の貯蔵場所になっておりますが、「リサイクル燃料貯蔵施設」と名付け、リサイクル燃料貯蔵株式会社といった会社を造って運営しているが、再処理工場が稼働しているわけではないので、使用済み燃料は増えるばかりですから、我が国ばかりではなく世界中の原発保有国は困り果てているのです。

それでも原発は安上がりな発電方法だとし、建設の裾野は広がっておりますから、間違いなく行き詰まることとなります。



Q：核廃棄物の保管、処理に関して今後の見通しはどのようなのでしょうか？

A：原子力発電に世界の先進国が競って参入してきたのは原・水爆製造のプルトニウムを製造する目的がありましたが、それ以上に熱を入れて研究・開発しようとしたのが、夢の核燃料サイクルを実現しようとしたからです。

「真っ赤に燃える太陽」は 55 億年もの間、熱と光を宇宙に放射しております、が、どうして冷えてしまわないのか不思議に思ったことはありませんか。

太陽の熱と光は原子核分裂によるもので、核分裂を続けて元の原子に戻り更に続ける理想的な核分裂サイクルが行われ永久に繰り返して熱と光を毎日、毎年放射続けているのです。

そこで思いついたのが、人工的に小さな太陽を造り永遠の動力源で電気を造ろう思い立ったのです。

イギリスで蒸気機関が発明され、動力源として活用されたため、それまで人力と畜力しかなかった他国を圧倒して産業革命となり、先進国として 100 年の間絶対的な力を誇示し、世界を支配してきました。

次の革命は内燃機関の発明で、産業、軍事力に内燃機関が活用され欧米が圧倒的な力でアジア、アフリカ、中東を支配していたが、植民地再分配で第一次世界大戦が勃発、次は内燃機関の燃料である石油の利権争い、争奪戦が第二次世界大戦で、我が国も ABCD ライル経済封鎖に締め上げられて戦争に踏み切ってしまった。

そして現在は脱石炭、脱石油が目標で、夢の核燃料サイクルですから世界が競争するのも当然かも知れません。

しかし、現実には厳しく余りの難しさと、危険性に各国は撤退を始めています。

「夢の核燃料サイクル」とは、

天然のウランには、燃える（核分裂する）ウラン 235 と燃えない 238 の 2 種類があるが、燃えるウランは僅か 0.7 % しかない。

ウランを燃料にする現在の原子力発電（軽水炉）だけだと石油よりずっと早くウラ